

齋藤有里

映画評論

『映画ドラえもん』から読み解く心理的影響と社会問題の提起

要旨

本研究は『映画ドラえもん』における、社会問題を表現している場面をセリフや描写から分析し、環境破壊の危機や命ある動物との共存などの社会問題に対する価値観を視聴者に身につけさせる作者の意図の有無を検証するものである。

水質汚染や森林伐採、過度な都市開発、愛護動物の遺棄などの社会問題に加え、人工知能を搭載したロボットとの対立も描かれている『映画ドラえもん』は、現在にも通ずる社会問題を表現していた。

検討においては、全44作品の社会問題を提起している部分を、セリフ・作画・描写に着目し、映画ごとにセリフの時間、発言者、内容を記録し、どのような特徴やメッセージ性があったかを考察した。さらに原作者である藤子・F・不二雄や監督を務めた芝山努が、作品作りにどのように取り組んでいたのかを書籍やインタビューの記事から読み取るという流れであったが、制作側の社会問題を扱った明確な発言は得られなかった。

この検討から明確な社会問題の表現は1990年代と2000年代の作品で描かれたことが分かった。そのうち原作者である藤子・F・不二雄が主に携わっていたのは4作品であり、いずれも人間が環境を汚すから、人間が楽をしすぎたから、といった人間の振る舞いに起因する課題が発生している。重いテーマではあるが物語の起承転結ははっきりしており、子供たちにも非常に分かりやすい内容であったため、視聴者に向けて社会問題に警鐘を鳴らす意図はあったと考えられる。